

## ♪おけさ♪列車の旅・スエズの小活劇

近藤 節夫

♪おけさ♪列車の旅は終わったが、思わせぶりな余韻を残したので旅の結末を紹介しておきたい……………。

明るく朝目が覚めるや、行動的な服装に着替え、どうしたらこの軟禁状態から抜け出せるか、あれこれ思案してみた。気まぐれに窓側の扉を力まかせに押したところ、意外にもバターンと開いてしまった。な〜んだ？この扉にはカギがかかっているじゃねえか？早速スポーツシューズに履き替え、恐る恐る外を警戒しながら傷んだ屋根瓦の上へ降りた。見るとなんと屋根の先端には、ご親切にも梯子まで立てかけてあるではないか。

「しめ！ しめ！」

しかし、少々話がうま過ぎる。まさか罠ではあるまいな。周囲に目を配りながら大胆不敵にもレンガ色の屋根の上へ降り、抜き足差し足で沈みこむ屋根瓦の上を縁まで、四つん這いになって這うように進んだ。

辿り着いた屋根先で、脱走用？に立てかけてある梯子を使って軟禁状態から脱出しようと、細心の注意を払って辺りを見回した。アフリカ大陸までやって来て、こんな捕物帳まがいの猿芝居をやるとは思いもよらなかった。

「しめた！ まだ誰にも見られていねえ…」

だが、油断は禁物だ。どこか建物の陰に狙撃兵がいるかも知れない。何と言ってもスエズは、戒厳令下で緊張感が張り詰めている。梯子中段でぱっと地面へ飛び降りた。まだ誰にも見られていない。さっと路地裏へ走りこむと、小走りに大通りへ走って出た。少し間をおいて呼吸を整え、平然と街の通りを運河方面へ向かって歩いた。老人、子ども、女たちは疎開してまったく街から姿を消し、完全に若い男、ロバ、にわとりと犬だけの街になっていた。やはり珍しいのであろうか、通り過ぎる男たちが、みんなわたしを見ては愛想よくニコリしてくれる。会釈を返しては、運河へ向けてひたすら歩いて行った。

通りに建ち並ぶ商店はシャッターを閉ざし、ビルの壁には弾痕が生々しい。爆弾が投下された跡には、大きな穴がえぐれて泥水が溜まっている。歩道は瓦礫の山で歩きにくい。破壊された車も放置されたままだ。運河の埠頭には、何艘かの貨物船が爆撃で破壊され、無残な姿を曝け出して係留されていた。運河の中ほどにも被弾して沈没した船舶が船底を上に向け轟沈していた。これでは世界に冠たる運河も当分の間使用できそうもない。

近くでは暇を持て余し気味の数人の、若いエジプト海軍兵たちが、相撲だか、レスリングのような取っ組み合いをやりながら、仲間同士で囃したてている。面白そうなので見ていたら、見慣れない日本人に興味を抱いたのか、あっという間にかれらに取り囲まれてしまった。矢継ぎ早の質問攻めにあい、たちまちそこは国際交流の場となってしまった。戒

厳令下の国際交流なんてあるだろうか。それにしても、戒厳令下に、こののんびりしたムードは一体どういうことなのだろうか。戦争とは一步距離を置いたような明るい戦争当事国の空気に、改めて考えこんでしまった。

しばらくして若い海軍兵士たちに別れを告げ、こっそりもと来た道に戻って監禁されていた部屋へそつともぐり込んだ。驚いたことに部屋の扉には、もはやカギはかけられていなかった。すぐにフロントへ降りて行き、旅券を返して欲しいと言ったら、フロントの男はじろりと一瞥したあと、ニヤリと笑いながら旅券を金庫から取り出し返してくれた。わたしの行動は把握されていたようだ。どうも腑に落ちない。エジプトの男どもに、手玉にとられているようだ。それにしても昨晚わたしをとつかまえに駅までやって来た兵士たちは、あの時何のためにこのおれをホテルへなんぞ閉じ込めたんだろう。あれっきりホテルへは顔を見せなかった。何か狐につままれたようだ。

フロントの男から、

「スエズの街をどう思う？」

と尋ねられた。

「兵隊さんと話をしてきたが、運河も市街も大分破壊されていて残念だ」と応えた。

「ジャー（ユダヤ人）の奴らに爆撃された。こっちは何もやっていないのに、あいつらには痛めつけられた」と、しきりに悔しがっていた。

ホテルを立ち去るとき、

「戦争の後片付けが終わったらいつかまた来てくれ」

と言われ、つい「あいよ！ またやって来るよ」

と気軽に応え、再びカイロへ戻るため、国鉄スエズ駅へ向かった。

あれからまもなくしてナセルが世を去り、サダトは暗殺されてその間36年が経つ。スエズ再訪の約束はまだ実現していない。

(社団法人日本ペンクラブ会員)